

わら草り焼印のあみ笠ふかくかぶり略中戀の手習三きねば叶はぬやき印のかしあみがさの
かさなりてうき世花がさかかさがさに略下

〔柳亭筆記四〕十二符わけの編笠

十二符の編笠符はあむ編目の十二あるをいふ也まひのそうしたかだちに鈴木の三郎まげ家
山伏となりて奥州へくだる事をいへる條に奥州の衣川高館の御所に著にけり鈴木何とか思
ひけんおひすかけをばかたはらにとりかくしおひのなかよりもうちかけとりいだしてき
るまに十二ふかけたる編笠をふかくと引こうで云々とあり編笠十符を度とするゆゑに
十二符はふかあみなりふかくと引こうでとあるにてまゐるべしまひのさうしは室町家の頃
つくりしものなればふるくより十符の編笠の名ありしゆゑに十二符かけたるとは理なる
べしさて十符の編笠といふ事さうしにも俳諧の句にもいまだ見いでず向の岡延寶八年印お
もじとおれおもはくの橋わたらばや不卜勸當忍ぶ菅笠の十符才丸菅笠にも十符の名ありし
か又談林俳諧の詞にて編笠にある名を菅笠におほせし句歟鷹つくば寛文十五雪ふりの編笠なれ
や富士の山道節今様會我元祿年といふさうしに野夫編笠をかぶりて吉原へかよふ事見え
り案に野夫は假字にて八符なるべし編目の八ツあるをいひ前の洞房語園に八所緘は淺しと
ある是なるべし十符は原よりの度なれば理ルにおよばずふかきものを十二符といひあさき
ものを八符前にいふごとく符は編めるといふにやあらん
因に云すべし符るものを十符を度とするは編笠にはかぎるべからず十符のすがごもの歌
は夫木抄文字ぐさり等にあり舞のさうしふしみときばに十符のうらなしあり草履うらなしは
あめわかみ子のさうしにとふの枕とあるも菅枕の類にてあめる小枕なるべし

〔守貞漫稿二十九〕編笠略